ニ可当覚悟是彼の志を此業ニ寄る所謂の第二なり」今迄海乗ハ水主船人而已可為賤業なりし故人ニ不好之且昔危弱の日本船ニて航海セシ者と比較する故諸人甚々之を危ふむと雖此小弱の日本船を以て渡海してすら災難ハ希なり況や堅国の西洋形の軍鑑をや陸上の人の考ニハ危候得共船乗人の身ニ成てハ全く安全の者なる由不然ハ水主船人の業ハ出来ぬ筈なり陸ニ在ても疫病地震等数レハ限なき災難あり海上ト在道の違も無之彼等ハ又無学か文盲の水主等の航海とハ違ひ測量等の学術ニ由て渡海致候得ハ概して危難無之死生（抹消）〔在夫〕有命ハ海陸共ニ同事ニ候」さて又仮ニ彼ハ転業致事と定て考え候得ハ折角今日まて学候業を其か為ニ尽候畢竟ハ一朝水泡ニ帰し他業ニ就候ても迚も満足ニハ出来不申事彼も承知孰も同考ニ候私ハ私の身ニ引較れハ一番判然たり譬ハ翻然学問を捨て人力を曳ても商売をしても航海者と成り陸軍者ニ成り昇官ニ就キ湿位ニ居候てハ今まて費候金銭畢竟中道ニして廃た而已ニて空ニ成り学得タ丈も用る事不叶御両親も満足ニ保養奉る事も難成到底国ニ報する処なく皇国良民たる可ラス左すれハ彼縦令志を枉テ移業致候ても其益ある歟否ハ甚疑敷、否、私ニ於てハ決て無益と存候」是ニて海上の危難も格別になき者転業の不利なる事志の不可撓と候此御業ノ要用なるを御考被下候ハヽ私ニ於て幸甚且彼も永々船乗を致居間敷候得ハ格別御不安心も可無かと考居候又不及なから私を始め在東京（此後アルナラ）諸親ハ彼ノ出航中ハ彼の家族ハ引受度と心懸彼と約束致置候「併しコレハ後々ノ事ヲ云ナリ」

武夫拝

御尊父様
御座下

62 明治8年4月1日 菊池長閑宛

第参号 四月一日認む （長閑注記）

謹白愈御安康御消光何寄之御事ニ候私無異謹学致居候間御省慮被下度候過日本宿ニ逢緩談仕候序尊諭之事ニ及ヒ同人極て御厚情ニ感し深く謝居候然共各人の所志ハ余事と違ひ容易に変移致間敷且不被致者ニて古語ニも匹夫と雖ヒ其志ハ不可奪とやら申候得ハ強ちにも不被申欤と考候素彼の海軍ニ心ヲ寄候事由と目的ハ私登京前彼の家書ニて御互に了解致且皆様御同意御感賞有之しと覚居候其趣旨ハ此度彼ゟ差上候書状ニも恐ハ記可有之候得共手短ニ云ハ今日皇国名典の多中ニも海軍尤甚し然レ共家国（ここ）の位置よりして見れハ必ス海軍之盛ニせされハ国の安全も難保是彼の海軍ニ志所以の一なり且英君当時米国ニ御遊学ニて海軍を御修学被遊御成業の後ハ旧臣ノ内ニて誰か力を添上候者有度ハ人皆所望彼も又此ニ見ある故飽まて海軍ニ精を尽し補佐の任

（封筒表）
「岩手県下陸中国盛岡　東京一ッ橋通
外加賀野　開成学校
菊池長閑様　菊池武夫
要信報平安」

（封筒裏）
「明八（抹消）〔参〕四月〔卅〕（抹消）一日」

（長閑注記）
（朱書）「〔四月六日達し〕」